

校 園 名： 山形大学附属幼稚園

所在地：〒990-0023 山形県山形市松波二丁目7番1号

☎023-641-4446

記載日：2016年5月16日

記載者 職・氏名：園長

板垣 由紀子

1.本園の概要並びに特色

(1) 沿革

明治36年山形県視学官高橋磯八郎氏を中心に私立山形幼稚園として元師範学校附属小学校において開園。昭和2年に県に移管し山形県女子師範学校附属幼稚園、昭和18年に国立山形師範学校女子部附属幼稚園を経て、昭和26年に学制改革により山形大学教育学部附属幼稚園と改称、平成17年山形大学附属幼稚園となる。地域の幼児教育への熱い期待を担い、視学官と篤志家により立ち上げられ様々な変遷を経て今日に至っており、113年の伝統と歴史がある。

(2) 使命

- ・安全・安心を基本とし、子どもを主体とした質の高い保育と幼小中の一貫教育を行う幼稚園
- ・家庭や地域との連携を大切にしたい幼稚園
- ・大学附属として、大学と連携した特色ある保育の推進、並びに、附属学校園として研究の推進及び発信を行う幼稚園
- ・幼児教育に携わる教員の養成や研修を行う幼稚園

(3) 教育目標 「心豊かでたくましい子どもの育成」

(4) めざす園経営

『こころふれあい のびるよろこび えがおうれしい 山形大学附属幼稚園』

(5) 保育の方針

①幼児期にふさわしい生活を創る保育

集団生活を通して、一人一人の個性や発達に応じたきめ細かい援助のもと、子どもが自ら選んだ活動(遊び)を主体的・創造的に繰り広げる生活を大切にする。

②遊びを通して、生きていくことに必要な力を育む保育

・生活の自立のための「体といのちの根っこ」、心の自立のための「心の根っこ」

・学びの自立のための「学びの根っこ」を育む保育を展開する。

(6) 園児数 (定員 102名 3歳児～5歳児 計4学級)

<3歳児>17名 2学級 <4歳児>34名 1学級<5歳児>34名 1学級

(7) 職員

園長1、主幹教諭1、教諭3、養護教諭1、非常勤講師2、事務係長1 (附小兼務)

事務主任1、PTA補助1、作業員2 (他に特別支援教育コーディネータ1、メンタルケアコーディネータ1、支援員1)

(8) 組織

平成21年度より、園長が専任化され、運営部が附属学校園を統括する体制となる。

2.本園の卒園生の活躍状況

- ・殆どが山形大学附属小学校に進学している。事情により公立小学校への進学も希にある。
- ・卒園生は4500名以上に及び国内外で活躍している。

3.本園勤務経験者の活躍状況

- ・本園勤務の後、小学校へ異動し、幼児教育の幼小連携の中心的な役割を果たしている管理職、や教員が多い。また、教諭として本園で勤務、小学校等での勤務の後、再度、本園に勤務する者もあり、幼児教育の経験を活かして園の中心的な職（園長・教頭・主幹教諭）で活躍している。
- ・園長経験者の中には、本園での園経営の実績をもとに、教育相談職や保育園長・幼稚園長として地域で活躍している方がいる。

4.本園の特色ある取り組み

(1) 大学との連携

①大学との共同研究

ア：保育の実践研究に関わる連携

- ・研究主題「幼児期に育てたい言葉」に関わり、研究協議会Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ並びに公開研究会において、継続して指導助言を受けて共同研究を行っている。
(地域教育文化学部・大学院教育実践研究科教授等6名)

イ：特別支援教育に関わる連携

- ・特別支援教育の充実のため、大学の専門教員よりスクリーニングや具体的指導の他、特別支援教育の視点を踏まえたアプローチプログラムの実践について助言を受け、共同研究を行っている。

ウ：幼小接続に関わる連携

- ・地域教育文化学部の幼小接続に関わる専門教員と連携し、附属小学校との年3回の連絡会や研究保育の機会に、指導助言を受け、幼小接続のあり方やカリキュラムについて共同研究を行っている。

②大学の施設活用並びに人材活用

○大学の施設活用と学生との交流（右写真参照）

- ・山形大学音楽ホールで、音楽科研究生によるピクニックコンサートを実施

○大学の人材活用

- ・「ふようキッズくらぶ」を立ち上げ、大学の専門性を活かした3分野の幼児向けワークショップを展開。

- 1 「ワールドくらぶ」（外国の文化や英語と親しむワークショップ）：人文学部・地域教育文化学部教員・学生
- 2 「ふしぎくらぶ」（自然科学等のサイエンスワークショップ）：理学部教員によるサイエンスワークショップ
- 3 「げんきくらぶ」（運動・体力向上、食育のワークショップ）：地域教育文化学部教員・学生



(2) PTAとの連携

- ①「幼児共育」をテーマに、子どもの成長と園環境の充実のために、「交流・研修・環境整備・園行事への協力」活動に取り組んでいる。
- ②公開研究会の運営協力や保育参加、保育サポーター等、協力していただける良好な関係を築いている。

(3) 地域との連携

①山形県教育委員会との連携

- ・山形県教育委員会の幼児教育に携わる指導主事より、公開研究会で毎回指導助言いただく機会を設けている。県内外から参集する参会者を前に、山形県の幼児教育の先導的役割を担う機会と役割を、県教委との連携で示している。
- ・山形県教育委員会が推進する「探究型学習推進プロジェクト事業」の協力園として、研究実践の成果を提供している。
- ・山形県教育センターで行われる新採教員の研修会において、毎年、保育参観の機会を提供し、教育課程や保育の理解に大きく貢献している。

②山形市との連携

- ・山形市教育委員会と市内の保育園・幼稚園等と連携し、幼保小連絡協議会において、国公立幼稚園代表として、研修の場を提供している。
- ・国公立幼稚園代表として「山形市子ども子育て支援会議」に参加している。

③所在地区との連携

- ・学校評議員会を年二回開催し、園の所在地区の地区会長を学校評議員として、様々なご意見を伺い、連携を図っている。入園式や運動会等の諸行事にご案内し、園を開いている。
- ・地域の農家のりんご畑の協力を得て、園児が観察や収穫をさせていただき連携がある。

④地域の未就園児親子への子育て支援

- ・年3回「すこやか広場」を開催し、地域の未就園時50組程を集めて、遊びや造形活動・読育などの子育て支援を行っている。

(4) 外部人材の活用

- ① 産婦人科医師による年長児対象「いのちの学習」
- ② 元園長による全学年対象「ワールドくらぶ」(右写真)
- ③ 他大学の人形劇サークルによる「人形劇鑑賞会」
- ④ 山大音楽科学生による「オペレッタ鑑賞会」



(5) 附属学校間の連携

- ①附属小学校、附属中学校、附属特別支援学校との交流学習を推進している。
 - 附属小学校と年長児の交流・・・一年生の授業や発表会の参観、給食交流
 - 附属中学校との交流・・・中学校の運動会参観、本園の運動会への中学生ボランティア交流
 - 附属特別支援学校との交流・・・園児と小学部児童の遊びの交流、高等部生の木工ベンチの活用と修理メンテナンス交流、バザー交流

5 .地域における本園の存在と実績

(1) 県内唯一の幼小中一貫教育を行う歴史と伝統ある幼稚園

- ・ 3歳児の志願者倍率は、ここ数年1.3～1.5倍程あり、地域のニーズが十分にある。
- ・ 志願理由の多くは「大学附属」「一貫教育」「教員の専門性」である。

(2) 教育実習等を通じた幼児教育に関わる優れた教員の養成を行う機関

- ・ 昨年度より実習生の増加（十数名から30名近い人数に）により年2回の教育実習を実施している。幼稚園免許取得への関心が高くなっている。
- ・ 実習生の半数以上が、実際に公立・私立の幼稚園や保育園への就職を希望しており、免許取得に大変熱心に取り組んでいる。

(3) 幼児教育の先導的な実践研究の発信と研修を行う機関

- ・ 公開研究会の参観者は、一般（幼保・こども園・小学校）・学生・来賓等を含めて毎年200名以上であり、参観上お断りすることがあるくらい県内外から多くの申込みがある。

(4) 山形市小学校長会や山形市教育委員会等と連携した幼小連携の研修機関

- ・ 本園では、幼小接続に向けたアプローチプログラムを作成し、園児の実態に合わせた保育実践を重ねている。小学校との連絡会や市教委が主導している幼保小連携の研修会でその取り組みが注目されている。

(5) 大学の専門性を活かした特色ある保育の提案園（先導的研究のモデル園）

- ・ 次期幼稚園教育要領改訂の観点を踏まえ、小学校の言語活動につながる研究主題として「幼児期に育てたい言葉」の研究実践に取り組んでいる。お茶の水女子大学名誉教授内田伸子氏より、言葉を大切に育てる保育のエビデンスについて講演いただいている。参観者の関心が高い。
- ・ 大学の専門性を活かした「ふようキッズくらぶ」では、理学部・地域教育文化学部・人文学部など幅広い学部教員から協力を得て、自然科学・英語・造形・食育・健康分野でのワークショップを展開している。保護者にも大変好評である。

6 .附属学校園の存在意義

- ・ 百年以上にわたり、山形県の幼児教育を牽引してきた本園、並びに附属学校の質の高い教育に県民が寄せる信頼は厚く、期待は大きい。
- ・ 子ども子育て支援新制度になり、「幼児教育の先導的研究」を行う園として地域における本園の役割や期待は益々大きくなっている。また、時代のニーズから「一貫教育」「幼小接続のモデル校園」としてカリキュラム研究やこれまでの質の高い実績も注目されている。
- ・ 長年にわたり築かれてきた県教育委員会との協力連携関係、並びに附属学校園勤務経験者の県教育界・教育行政面での活躍の現状から、附属学校園の存在意義は大きいと考える。